

学習者が犯した誤用の原因は何か —対のある自他動詞を中心に—

1 問題の提起

外国語を習得する時において、動詞の習得は非常に重要である。日本語の自他動詞の習得研究は 1990 年代に入ってから盛んに行われており、外国人日本語学習者にとって自他動詞の習得は難しく、特に結果状態が注目される自動詞文（「さっき電話がかかってきた。」、「テーマやっと決まった。」等）の習得が難しいと指摘されている（小林・直井, 1996; 守屋, 1994）。しかし、なぜ学習者が習得するのが難しいのかという理由に触れる研究は少なく、その中でも原因として学習者の母語の影響をあげるものが多い（小林, 1996; 王, 2012）。

Richards (1971) は学習者の誤用の原因を言語間の誤り（母語の影響）と言語内の誤り（言語発達上）に大別されるとしている（坂本, 2005）。母語が第二言語習得に与える影響は間違いなく存在している（白畑ほか, 2010: p.2）が、学習者が第二言語を使用するときの誤りの原因を判断することは難しく、かつ慎重に母語の影響を判断する必要がある（坂本, 2005; 奥野, 2005）。

本研究は坂本（2005）と奥野（2005）の観点に従い、「結果状態が注目される自動詞文」に焦点を当て、中国人日本語学習者を対象にしてアンケート調査を行い、学習者の誤用（一種）の原因を探った。

2 調査の概要

調査期間：2016 年 4 月 25 日—29 日

調査場所：中国安徽省にある S 大学と N 大学

調査対象：S 大学日本語学科三年生 26 名（以下、S3 組）

N 大学日本語学科二年生 31 名（以下、N2 組）、三年生 35 名（以下、N3 組）の三群、合計 92 名

（回収した有効調査票は 85 部で、有効回答率が 92.4%であった。）

調査問題のデザイン：

- ① 学習者が用いている教科書の進捗状況に応じ、24 対の「対のある自他動詞」を選出し、調査の問題に用いた。
- ② 調査問題は多肢選択問題の形である。また、「結果状態が注目される自動詞文」が今回の研究の焦点であるため、問題作成時には、正解を全て「が＋自動詞」だとした。また、学習者に手がかりとならないように、問題に出てくる助詞を選択肢に入れ、「分からない」という選択肢も設けた。
- ③ 言語使用には一定の文脈が必要なため、すべての問題に適切な文脈をつけた。また、学習者の理解に支障がないように、すべての文脈情報を学習者の母語（中国語）で提示した。

アンケート調査問題例：

五年ぶりに故郷に帰ったあなたは、町並みが発展していてびっくりしました。

「ああ、こんなにたくさんビル_____のか。」

答え： ① が建てた ② が建った ③ を建てた ④ を建った ⑤ 分からない

- ④ 調査する前に、学習者が調査に出ている動詞が自動詞か他動詞か知っているかチェックするため、自他性質判断タスクも設けた。

自他性質判断タスク問題例：

始める：□自動詞 □他動詞 始まる：□自動詞 □他動詞

3 調査の結果

どの群においても、「を+他動詞」類の誤用が多かった（N2組 26%、N3組 22%、S3組 22%）。また、それぞれの群は違う学校、違う学年の学習者であるが、誤用のパターンは類似している。

坂本（2005）と奥野（2005）の議論から、誤用の原因の判断は慎重にせざるをえないため、本研究はアンケート調査のデータを、①「日本語学習者作文コーパス¹」・②「学習者誤用辞典²」・③「本研究がアンケート調査と同時に行った『結果状態が目目される自動詞文』を焦点とした発話誘出タスクで得られたデータ」の3つと比較したところ、以下の結果が得られた。

まず、「を+他動詞」類の誤用は、中国語母語話者だけが産出するわけではなく、他の言語を母語とする日本語学習者も産出する。

次に、アンケート調査以外の結果では「を+他動詞」類の誤用が少なく、同じ中国人母語話者のデータにおいても少ない。

4 結論

アンケート調査における学習者の誤用（「を+他動詞」）の原因について、以下の様に結論付けた。

①「を+自動詞」類の誤用は中国人母語話者だけが犯す誤用ではなく、学習者の母語と関係なく、言語内の誤用の可能性が大きい。つまり、母語の影響に関しては無いとは断言できないが、関係が薄いと考える。

②「を+他動詞」類誤用がアンケート調査で大量に出ているのは、アンケート調査のような不自然な言語活動を原因とする。

参考文献

- 奥野由紀子（2005）『第二言語習得過程における言語転移の研究』風間書房
- 王冠華（2012）「中国日本語学習者有対自動詞習得状況的実証研究」『日語学習与研究』5, 86-94, 对外経済貿易大学.
- 小林典子・直井恵理子（1996）「相対自他動詞の習得は可能か—スペイン語話者の場合—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』11, 83-98, 筑波大学留学生センター.
- 小林典子（1996）「相対自動詞による結果・状態表現—日本語学習者の習得状況—」『文芸言語研究・言語篇』29, 41-56, 筑波大学.
- 小林典子（2001）「第4章 誤用の隠れた原因」, 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 [編]『日本語学習者の文法習得』63-82, 大修館書店.
- 坂本正（2005）「母語干渉判定基準—五つの提案—」, 鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ [編]『言語教育の新展開—牧野成一教授古稀記念論集』275-287, ひつじ書房.
- 守屋三千代（1994）「日本語の自動詞・他動詞の選択条件—習得状況の分析を参考に」『講座日本語教育』第29分冊, 151—165, 早稲田大学日本語教育センター.

¹ 日本語学習者作文コーパス (<http://jhlee.sakura.ne.jp/JC/>)、2016年10月14日アクセス。

² 寺村（1990）『外国人学習者の日本語誤用例集』、市川（1997）『日本語誤用例文小辞典』、市川（2010）『日本語誤用辞典』